キノコに学ぶサバイバル術

赤嶺 淳

クロラッパタケ。このキノコが生える場所を知らないと、踏んでしまうことも。目を凝らすと、周囲にたくさん生えていた。

文化人類学者アナ・チン（Anna Tsing）さんの最新作、*The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*（2015）は、刺激的だ。米国の文化人類学会賞をはじめ、多数を受賞したのも頷ける。

『マツタケの可能性――破綻した資本主義世界を生きぬく術』とでも意訳できる本書は、日本で消費されるマツタケのサプライチェーンを追ったモノ研究の傑作である。ストーリーは、不安定性（precarity）と不確実性（indeterminacy）を軸に展開される。

無尽蔵と思えた自然資源を前提に、産業革命以降、わたしたちは右肩あがりの発展を追求してきた。しかし、いまや地球の有限性はもちろんのこと、異常気象が頻発する不安定な環境に苛まれてもいる。グローバルな競争に晒され、非正規雇用が常態化した今日、右肩あがりの発展モデルなど、もはや幻想でしかない。

こうした現状認識にたつ本書は、「今日よりも豊かな明日」が約束されていた20世紀的発想を捨て、不確実な時代に即した社会科学の再構築を意図している。その試みが、米国のオレゴン州、フィンランドのラップランド（北極圏）、中国の雲南省、京都市を舞台とするマルチ・サイテット民族誌（multi-sited ethnography）と、人間とマツ、マツタケの三者関係のみならず、マツとマツタケ菌、岩石といった人間以外の諸要素間の相互関係をも視野にいれた多種間民族誌（multispecies ethnography）の統合である。

この夏、4日間だけだが、北極圏はロバニエミを訪問する機会を得た。サンタクロースの故地として知られる街だ。同地出身でフィンランド・キノコ協会のヨルマ・パルメン（Jorma Palmén）会長に、とっておきの場所を案内してもらう贅沢なものだった。しかし、今年の夏は寒かったらしく、残念なことに滞在中にマツタケを発見することはなかった。例年なら、7月末から1か月ほどがマツタケのシーズンだという。

だが、収穫もあった。まずフィン

ロバニエミ郊外のマツ林

不確実な時代を生きる

ヨルマさんの乾燥キノコ。
ヨルマさんは、それぞれに
適したレシピを紹介してくれた。

アンズタケの群生。
林のなかで鮮やかな黄色に
出会うと、ギョッとすることも。

アカチチタケ。このキノコは、
小さい方が歯ごたえがよいため、
小さいものを採取する。
茹でて刻んでサラダとして食べた。

ランドの人びとがキノコと森を愛しているさまを実感できたことだ。まるで刹那的な夏を楽しんでいるかのように、かれらは寸暇を惜しんで森に浸っていた。ヨルマさんは、湖で釣りもすれば、ザリガニも捕る。

つぎにアナさんは触れていないけれども、マツタケは、ヤマドリタケやアンズタケなどの、あまたある食用キノコ類の一種にすぎないことも理解できた。保存用乾燥キノコは、単調になりがちな冬期の食卓に彩りをそえる貴重な食材だ。キノコ専用の乾燥機をもつヨルマさんは、マツタケをふくむ16種の乾燥キノコをストックしていた。

人びとには、それぞれに嗜好するキノコがあり、そうしたキノコが育つスポットを秘密にしている。注意すべきは、そうした各自のマル秘スポットが、国立公園や他人が所有する林であったりすることである。そんなことが可能となるのは、北欧地域にはEveryman's Rights（みんなの権利）なる慣習があり、所有権の有無にかかわらず、森を散策したり、キャンプしたりするなど、自然を享受する権利が確立しているからだ。キノコ類やベリー類を採取することも、この権利にふくまれる。

この慣行は、井上真がコモンズの訳語として、所有権に着目した共有、ではなく、利用権に着目した共用をあてることの適切さを支持する事例となろう。まだまだ詰めるべき点は多々あるものの、この思想は、シェアリング・エコノミーの可能性を示唆し、アナさんが模索する21世紀的社会創造のヒントとなるはずだ。そんなこともキノコに惹かれる理由のひとつである。

謝辞

本調査は、(1) 2017年度スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団助成「オープン・アクセス論再考——キノコ類採取における「万人の権利」の史的発展と現代的課題」(GA17-JPN-0022)、(2) 江頭ホスピタリティ事業振興財団平成29年度研究開発助成「コモンズ論再考——キノコ類の採取と万人の権利（everyman's rights）をめぐるマルチサイテット・アプローチを手がかりにして」によって実施することができました。フィンランドでキノコ狩りを案内くださったヨルマ・パルメン氏とルミン・バアリオ（Lu-Min Vaario）博士にも感謝申しあげます。

参考文献

◉井上真 2004『コモンズの思想を求めて——カリマンタンの森で考える』岩波書店

◉Tsing, Anna 2015 *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*. Princeton: Princeton University Press.

profile

AKAMINE Jun

1967年大分県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科教授。専門は、食生活誌学。おもな著書に、『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性』(新泉社)、『グローバル社会を歩く——かかわりの人間文化学』(編著、新泉社)、『鯨を生きる——鯨人の個人史・鯨食の同時代史』(吉川弘文館)など。